日本英学史学会第 50 回全国大会 2013.9.29

『いろは文庫』の英訳④－出版の背景―

川瀬　健一

１：問題の設定

齋藤修一郎（1855－1910）が 1880（明治 13）年に英訳版忠臣蔵として『*The Loyal Ronins*』を出版するに至った背景については、従来は『名流百話』（渡辺斬鬼編 1909・明治 42 年文錦堂刊）が示した、「遊びすぎて負債山をなして進退きわまり、友人が持っていたいろは文庫を英訳して利益を上げて負債を返した」との説が、巷に流行っている（資料１参照）。[1]

しかしこの「説」は、齋藤自身が書いた序文とは大いに異なっており、「金時計事件」の収賄で弾劾されて官僚を辞任するようなものは「若い時から女郎屋に入り浸った」からとの民権派によって捏造された齋藤像に依拠した妄説の可能性が極めて高い。

『*The Loyal Ronins*』の出版の背景について従来とは異なる説を述べたのは塩崎智である。塩崎智氏は『アメリカ「知日派」の起源―明治の留学生交流譚』（2001 年平凡社刊）の中でアメリカにはボストンを中心として、日本文化に深い関心を持つ上流階級の人々が多数存在し、この人々が直接日本の生活習慣や言語、美術、文学についての貴重な情報源としていたのが幕末以来多数アメリカにやって来た日本人留学生や外交官などであり、日本人の方も彼らの求めに応じて質問に気軽に答えたり、積極的に情報発信をしていたことを各種の資料を駆使して論証した。そしてこれらのアメリカ人と日本人とのネットワークの情報交換の中で日本文化についての著作として結晶したものとして「森有礼の一連の著作や、金子堅太郎の『娘節用』の英訳、齋藤修一郎の『いろは文庫』の英訳」などを挙げている（ｐ231）。

しかし森の一連の著作や金子堅太郎の作品の出版の経緯[2]については具体的に考察されているが、齋藤のものについての考察はないので、塩崎氏が齋藤の著作が、知日派のアメリカ人と日本人とのネットワークの中で出版されたと考えた根拠は示されていない。

昨年末から『*The Loyal Ronins*』についての詳細な研究をする中で、初めて齋藤のその序文を読んでみると、そこに出版の背景が明確に述べられており、それはまさしく塩崎氏が述べたことを裏付けるものであった。

---

[1] たとえば外交史家・信夫淳平の『明治秘話二大外交の真相』（1928・昭和３年萬里閣書房刊）では、「ある種の軍資金補充のため忠臣蔵を英訳して紐育の一書肆に売付けた」と記されている（この本は、アメリカ大統領セオドア・ローズベルト *Theodore Roosevelt* が講和成立後に、『*The Loyal Ronins*』を読んで感銘を受けて日本びいきになったと日本全権小村寿太郎外務大臣に語ったという「逸話」を初めて紹介した）。

[2] 曲山人作の原本はギルバート・アトウッドから借りたもので、英訳の動機は、『アトランティック・マンスリー』誌の編集長で有名な小説家のウィリアム・ハウエルズと会談した際に、彼が日本の小説の構造や思想を研究したいと言ったので、彼の研究に資するために『娘節用』の英訳を決意したと。この小説が掲載された雑誌は同誌の 1878 年７月号である（塩崎著のｐ198・199）。

今回の発表は、塩崎氏の説を裏付けるであろう新発見の資料の紹介を含めて、齋藤の序文に基づいて『*The Loyal Ronins*』出版の背景を考察してみたい。

２．齋藤の序文に述べられた出版の背景

齋藤の序文（**資料２参照**）によると、英訳の動機は、1876 年のフィラデルフィア万博で日本の文物が大いにアメリカ人に受けたが日本の小説はまだ知られていないと考えたこと。その後 1879 年になって『いろは文庫』英訳を決意して半年苦闘したが果たせず、年末に知己をえたイギリス人グリー *Edward Greey* の助力をえて 1880 年夏にようやく出版に至ったと、出版の背景を説明している。[3]

そして出版を支えた人脈は、『いろは文庫』原本を貸してくれたボストンのギルバート・アトウッド *Gilbert Attwood* 氏、他の為永の諸本を貸してくれたニューヨークの「ふくいまこと」氏とエールカレッジの司書 A・ヴァン・ネーム *A. Van Name* 氏、そして他の日本の本を見せてくれたボストンのジョン・A・ローウェル *John A. Lowell* 氏と明確に述べられている。

３：出版を援助した人々

塩崎智氏の著作によって出版を援助してくれた人々それぞれの人物像を見ておこう。

・ギルバート・アトウッド *Gilbert Attwood*：

1825－1881.2 ボストンの金融街であるステイト・ストリートで 30 年以上働く。為替ブローカー兼銀行業のオフィスを構える。ボストン・アート・クラブ（美術館兼アート・スクール　1854 年設立　創立者の一人）、セント・ボトルフ・クラブ（新興のブラーミン Brahmin：ボストンの上流階級が参加した文学・芸術家愛好クラブ）、アメリカ考古学協会、アメリカ東洋協会などに所属。ボストンブラーミンの一員であろう。1870 年ごろからボストンに集まる日本人留学生に積極的に関わり、留学生の留学費用預かり人を務める。日本人留学生との交流を通じて日本文化についての深い情報を手に入れ、特に関心があったのが日本文学。1871 年９月には日本人留学生の援助を得て『昼寝の夢』『袖鑑万物蔵』を英訳、さらに『娘節用』も英訳し、『膝栗毛』の英訳の梗概も作る。初代駐米公使森有礼とも親交を結び、森はアトウッドを非公式ながら日本文化を広め留学生の監督も務めるエージェントと

[3] 齋藤が日本の代表的な小説として忠臣蔵を選んだ背景と、これを決めたのが 1879 年である理由については、2012 年 11 月と 2013 年 1 月の本部例会にて報告した。また忠臣蔵本の中でも外伝ともいえる為永春水作の『いろは文庫』を選んだ理由については、2013 年 7 月の本部例会にて報告した。要するに齋藤が幼い時から親しんでいた本が忠臣蔵であったことと、彼の属する越前府中本多家は赤穂事件と深い関わりがあり、明治３年に彼が経験した本多家家格問題―府中騒動は赤穂事件と瓜二つの事件であったため、自分自身の問題として赤穂事件をとらえていた齋藤は、1879 年の年初の本多家家格問題の解決を契機に、忠臣蔵を日本を代表する小説に選んだ。さらに齋藤の手元にあった忠臣蔵本は『いろは文庫』だけであったことも英訳文の詳細な検討からわかることである。

して遇していた。

・A・ヴァン・ネーム *A. Van Name* :

初代駐米公使森有礼とも親交のあった人物で、エール大学図書館に勤務するジャパノロジスト。森は彼の求めに応じて日本語の書籍の手配をしている。

・ジョン・A・ローウェル *John A. Lowell* :

1798－1881。ローウェル一族はボストンの典型的なブラーミンで、実業家・貿易商であり政治家も務めている。ジョン・A・ローウェルはこの実業部門の経営を任された人物で、彼の息子がオーガスタス・ローウェル *Augustus Lowell*（1830－1900）、その子供が著名なジャパノロジストで日本に関する著作が多数あるパーシバル・ローウェル *Percival Lowell*（1855－1916）とエイミー・ローウェル *Amy Lowell*（1874－1925）である。

※残念ながらニューヨークの「ふくいまこと」氏は不明。石附実『近代日本の海外留学史』（1992 年中央公論文庫）巻末の留学生名簿にも見当たらない。

これに齋藤の協力者であるエドワード・グリーを加えてみよう。

・エドワード・グリー　*Edward Greey* :

1836?－1888.10　著名な日本と中国の工芸作品の輸入業者で小説家。ニューヨークの東 17 街 20 番地に店を構える。イングランドのサンドイッチに生まれた。1860 年にはイギリス軍の大尉となって中国に赴き、北京の襲撃で海兵隊員を指揮した。その後日本に赴き、イギリス公使館付の武官となる。日本滞在中には彼は日本の国の風習と芸術と文学、そして政治制度を勉強。1868 年ごろアメリカにわたり、日本の陶器と他の芸術細工物の売買に従事。フランシス・ブリンクリー　*Francis Brinkley*（1841-1912）が集めた日本陶器の売買を一手に担い、彼の書いた日本陶磁器に関する本『History of Japanese Ceramics』の出版にも寄与した[4]。また日本についての小説も書き、『A Captive of Love』『The Golden Lotus』『Young Americans in Japan』『The Wonderful City of Tokio』『The Bear Worshipers of Yezo』がそれである。1888 年 10 月 1 日に自宅で短銃で自殺（THE NEW YORK TIMES の 1888 年 10 月 2 日の記事「SUICIDE OF EDWARD GREEY」などによる）。彼の年齢は 1880 年 6 月 15 日の国政調査では 44 歳。死去した当時は 52 歳か[5]。

---

[4] ブリンクリーは 1867 年に英国海軍の砲兵大尉として来日した。グリーも同じく海軍の大尉であり二人は旧知の中であったはず。ブリンクリーはその後海軍砲術学校や工部大学校でも教鞭をとり、ジャパン・ウィークリー・メール紙上でも健筆をふるった。のちにこの新聞を買収して社主・主筆となり、日本について積極的に海外発信を行う。同時に日本外務省の顧問格として条約改正交渉にも関与した。ボストンから帰国後の齋藤とも条約改正交渉を通じて旧知の仲である。

[5] この時期に『*The Loyal Ronins*』完成のためグリー家に齋藤が滞在していた。この関係

THE NEW YORK TIMES の 1886 年 12 月 6 日の記事には、グリーが主催したアート・ディナーの詳細が書かれており、ゲストスピーカーとして、日本で美術について講義した経験のあるフェノロサ *Ernest Francisco Fenollosa*(1853－1908)やジャパノロジストとして著名なビケロー *William Sturgis Bigelow*（1850－1926）そして生物学者で日本でも教鞭をとったモース *Edward Sylvester Morse*（1838－1925）なども来ている。このモースとフェノロサとビゲローもボストンのブラーミンと呼ばれる上流階級の一員なので[6]、グリーは在米の日本人や日本文化に関心のあるアメリカ人とも広い人脈を持っていたことが伺える。

４：*『The Loyal Ronins』* 出版の背景

このように出版を援助してくれた人々は皆、ボストンを中心とした、日本文化に深い関心を持っている上流階級の人々や知識人であった。そして齋藤が使用した『いろは文庫』原本がアトウッドから借りたものであったことは、金子堅太郎の例と同じであり、齋藤が日本の小説を翻訳することを促した人物がいたかどうかは不明ではあるが、齋藤の場合も金子と同じく、ボストンを中心とした、日本文化に深い関心を持っている上流階級の人々や知識人の支えがあって初めて出版されたことが推測できる。そしてこのネットワークのキー・パーソンはアトウッドであり、塩崎氏の著書によれば、彼ら日本文化に深い関心のある上流階級の人々に積極的に関与し、日本と日本文化について積極的にアメリカ人に広めていたのが駐米公使森有礼であった。

5：新発見の資料　アトウッドから森有礼へ贈られた *『The Loyal Ronins』*

兵庫県赤穂市の大石神社に一冊の *『The Loyal Ronins』* がある。この本は 1880 年に出された初版本で、その見開きには注目すべき書き込みがあった。

それは、ギルバート・アトウッドが、当時駐英公使としてロンドンに赴任していた森有礼にこの本を送るにあたって記した献呈の辞であると思われる（**資料３参照**）[7]。

で 6 月 15 日実施の国勢調査結果を入手することとなった。

[6] 塩崎著前掲書の p 67 の記述による。ブラーミン Brahmin　とはインドのカーストの最高位であるバラモンに由来し、教養あふれる上流階級といった意味。ボストンで貿易や商業で財をなした裕福な階層からなり、学問や文学・美術などに関心が深く、特に東洋文化への関心の深い人々。宗教的にはユニテリアン派。後にはメンバーの紹介で多くの優れた学者や文学者がメンバーとなっている。

[7] ネット検索をしていて「赤穂義士史料館」http://www.age.ne.jp/x/satomako/TOP.htm というサイトの「赤穂事件補遺年譜７」に平成 5 年のこととして「前湊川神社禰宜林尚右氏、義士等書状「雲泥屏風巻物」・吉田忠左衛門書状他を含む「浅野家忠臣筆跡」（辻善之助鑑定書付）・洋書「ザ・ロイヤル・ローニン」（エドワードグリー著・斉藤修一郎共訳、著者よりの駐英国特命全権公使森有礼に贈るサイン入り）を奉納」との記事を発見。サイト管理者佐藤誠氏（東京在住）に問い合わせたところ、氏は大石神社の非常勤学芸員でさっそく神社に赴き写真を撮ってくださった。

献呈の日時は 1880 年 8 月 10 日。この日は『*The Loyal Ronins*』出版の直後の時期[8]で、出版を支援したアトウッドが、この本の出版を待ち望んでいた森有礼に、出版直後に本を送ったものと考えられる。

※アトウッドの献呈の辞の問題点：年次を 1880 年 8 月 10 日と読めるかどうか？

①「188〇」で最後の文字が、「０」か「４」か「６」か

②月を「Apl」と読むか「Au」と読むか。「Apl」なら四月だが、「Au」で８月とよめるのかどうか

※1880 年 8 月 10 日と判断した理由

①献呈の辞は両人がとても親しいことを示している。アトウッドは 1881 年２月に死去しているので、森有礼にこの本を送ったのはアトウッド本人とみるのが妥当。森は 1879 年 11 月 19 日から 1884 年２月まで駐英公使を務めていたので、献呈の辞の年次は 1880 年 8 月 10 日とみるのが妥当。

②アトウッドのサインの後ろの「B」はブラーミンの略であろう。つまり親しい人との間でのみ交わされる自称として。と考えるとアトウッド本人である。

③1884 年 4 月でも 1886 年４月でも、1880 年 8 月に出版された本をアトウッドの家族が送るというのも意味不明である。したがって 1880 年８月で、アトウッド本人が送ったのではないのか。

④８月 August を「Au」と略して書くことは個人的にはあったのではないか。月の名で頭文字二字が「Au」になる月は 8 月のほかにはない。

この新発見の資料からも、『*The Loyal Ronins*』は、ボストンを中心とした、日本文化に深い関心を寄せる上流階級や知識人の人々の支援で出版されたことが伺われる。

『名流百話』（渡辺斬鬼編 1909・明治 42 年文錦堂刊）が示した、「遊びすぎて負債山をなして進退きわまり、友人が持っていたいろは文庫を英訳して利益を上げて負債を返した」との説は全くの盲説であった。

---

[8] これは 1880 年９月 13 日のニューヨーク・ヘラルド紙に、この本の紹介がわずか数行だが掲載されていることと、本の二人の訳者の序文の日時が 1880 年７月 19 日となっていることから判断した。